

◇……前號には本邦古典文學研究の權威たる頼原退藏氏や高谷仲氏の玉稿を載いて錦上花を添へましたが、本號には淨瑠璃研究家としてお馴染深い太宰府博士が「大衆教育」の續稿を寄せられ、本誌として洵に光榮の至りでありそれだけ編輯の責任重大であることを痛感しております。

◇……近石泰秋氏の「操り淨瑠璃に於ける謎判じ物」には他の追隨を許さぬ秀稿であり、泰秋氏が淨瑠璃研究の該博なる事はたゞく「驚嘆の外はありませんなほ且つ同氏が考證を得るための熱心なと資料の正確なるには敬服に堪へませぬ、まさに本號の、「好讀み物」として愛讀を重ねるでせう。

◇……人形淨瑠璃は没落するとか、前途悲觀の傾向なりとか、甚だ不遜な言辭を流布する輩があります、幾多の傳統藝術において人形淨瑠璃ほど強固なる基礎を有し、わが國民性を表現する藝術は淨瑠璃を借いて他になく、殊に人形淨瑠璃はわが大阪の郷土藝術として大阪人が擁護せねばならぬ義務こそあれ、郷土藝術を破壊するが如き言

辭を弄するは斯道の異端者と云はねばならぬ、本誌は飽くまでも郷土藝術保護のために最善を盡し、操觚の餘を執つて斯道興隆に寄與すべく此の機會に宣言します。

◇……幾多の名淨瑠璃を創作して、日本文藝史上不滅の地位を獲得した近松門左衛門が歿したのは享保九年十一月廿二日、今年はその二百二十年忌である、淨瑠璃と言へば「近松」と訓ふる如く、近松あつて始めて人形淨瑠璃が二百年の傳統を保つたのかも知れない、斯くみる秋、近松こそ大きな存在でありその足跡の偉なるを感ずるの際淨瑠璃の將來を茶番するが如き言行を恣にするれば、泉下の近松もさぞ嘆き悲しむであらう。

◇……戦局の様相はますます深刻苛烈を極めつゝある、われは盡忠無比の皇軍將士に感謝の赤誠を捧げ、藝能文化の向上發展を圖り以て國家の鴻恩に酬はねばならぬ純眞に嚴肅に敬虔に、郷土藝術を研究して一路藝能報國に邁進こそわれ等の使命である、撃ちて止まむ、の燃ゆるが如き氣魄をもつて斯道の興隆に努めよかし。

淨瑠璃雜誌 第四百廿三號

(昭和十八年十一月廿五日)
毎月一回 二十日發行

●本誌 一部 金五十錢 (送料四錢)
●特別 行爲税相當額 (金十錢) 金六錢 (税共)
●十二部 金六圓六十錢 (税共)

●御注文は一切前金の事
●雜誌發送を以て領收證に代ふ
●外國送りは一冊に付郵税十錢を要す
●舊替は良花名物淨瑠璃雜誌社。
●日座内阪二九二八番

廣告料

御一報下さらば早速營業部員を差向り料金御相談申上げます、何卒御下命の程御願致します。

○特等は一頁以下の需に應ぜず六圓以上の特約には割引す

○製版を要する時は其實費を申受く

○廣告料は總て前金の事

○一行九ポイント活字

大坂市西成區千本通二ノ三三

發行所 樋口虎之助

編輯人 樋口虎之助

印刷所 高坂字吉

印刷所 盛進堂印刷所

發行所 淨瑠璃雜誌社

大坂市西成區千本通二ノ三三

(西六九九四)